

カンキツ黒点病（病原菌：*Diaporthe citri*）

○ 被害と発生生態

糸状菌によって起こる病気であり、大きさ 0.1 ～ 0.5mm の黒色の病斑が葉や枝、果実の表面にできる。収量への直接の影響は少ないが、果実が着色すると黒点が目立ち外観が損なわれるため、商品価値が低下する。

感染時期によって病斑が異なり、初期に感染したものほど病斑が大きくなり、黒点の周囲には白い縁取りが見られる。8月下旬以降に感染すると、平滑で小さな病斑となり、果実の着色後も周りに緑色を残すことが多い。

本病の唯一の伝染源は保菌した枯れ枝である。樹上の枯れ枝には柄子殻が形成され、その中の柄孢子が降雨によって飛散する。また、地上に落ちた剪定枝など比較的太い枯れ枝には子のう孢子が形成される。果実への感染時期は6～10月である。感染には24～28℃で8時間以上、20℃で12時間以上の濡れ時間が必要である。

枯れ枝の多い老木園・密植園や6～9月の降水量の多い年に発生が多い。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・適切な間伐、整枝剪定により樹冠内部への採光を図り、枯れ枝の発生を抑える。
- ・枯れ枝の除去を徹底し、伝染源を少なくする。また、園内の剪定枝が持ち出せない場合は、一カ所に剪定枝を集めてビニールシートで覆うか、チップパーでできるだけ細かく砕き、黒点病の伝染源とならないようにする。

(イ) 薬剤防除

- ・薬剤防除は6月上中旬に第1回目を行い、その後の防除時期は薬剤の残効を考慮して決める。山口県内で多く使われているジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤の散布間隔の目安は、前回の防除日からの累積降水量が200～250mmに達したとき、もしくは30日経過したときである。



幼果

着色前
カンキツ黒点病の病徴（温州ミカン）

着色後